

## 研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 7  
P.24-31 (2019)小児看護実習におけるペア実習に対する学生の感じるメリット・デメリット  
～実習時期による違い～The Merit and Demerit of Pair Training at Practicum in Child Health that Nursing  
Students Feel about – The Difference by the Training Term –林 亮<sup>1)</sup> 齊藤麻子<sup>1)</sup> 内野恵子<sup>2)</sup>  
HAYASHI Ryo SAITO Asako UCHINO Keiko  
石井くみ子<sup>3)</sup> 川口千鶴<sup>1)</sup>  
ISHII Kumiko KAWAGUCHI Chizuru

## 要 旨

領域別実習の小児看護実習を受講する学生のペア実習に対する認識の変化を明らかにすることを目的として学生 10 名を対象としてインタビュー調査を行った。その結果、学生が捉えたペア実習のメリットとして、【対象理解の深まり】【負担の軽減】【ケアの可能性の拡大】【学習意欲の向上】【グループの学習機会の拡大】の 5 のカテゴリーが、ペア実習のデメリットとして、【方針のすり合わせに伴う困難】【主体性発揮の阻害】【実習の進め方への戸惑い】【周囲からの評価に対する不安】【ケアの質の低下】【学習機会の減少】の 6 のカテゴリーが抽出された。学生は実習経験を積む中で、ペア学生との協働を進める上で自らに課せられた責任を自覚し、看護過程学習の充実を学生自身が求めるようになることで、個人ではなくペアとして実践をより良いものにしたいという意識の変革が伺えた。教員・指導者は学生の変化の過程を捉えた指導により、ペア実習の学習効果を高めることができることが示唆された。

索引用語：看護学生、ペア実習、メリット・デメリット、小児看護

Key words : Nursing Student, Pair training, Merit and Demerit, Child health nursing

## 1. 背景・研究目的

小児医療の発展による入院期間の短縮化や少子化等により、小児科を有する一般病院は 1990 年の 4,119 件から 2015 年の 2,642 件、一般診療所は 1990 年の 27,747 件から 2014 年の 20,872 件と減少の一途を

辿っている<sup>1)</sup>。加えて、看護師養成校は平成 19 年度で 1,659 校であったものが平成 28 年度では 1,793 校、総定員数もそれに準じて約 22.7 万人から約 27.5 万人と急激な増加を遂げている。このような状況の中で小児看護実習を取り巻く環境は、全国的に小児看護実習の受け入れ施設を確保することが困難となっている。本学の小児看護実習においても、学生が 1 人で 1 名の患児を受け持つことを前提としていたが、実習病院によっては実習対象患児の確保が困難を極め、入院中の患児 1 名を 2 人の学生で担当すること（以降、ペア実習）もしばしば起こっていた。ペアで行う実習を

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科

3) 山梨大学大学院総合研究部医学域看護学系

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*2) *International University of Health and Welfare*3) *Graduate School Department of interdisciplinary Research Division of Medicine, Nursing Science University of Yamanashi*

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

導入するにあたり、ペア学生間における学力やコミュニケーション能力の差、ペア学生間及び学生と教員・臨床指導者間の関係性が学生の学びや実習に対する姿勢に影響を与えているのではないかと考えた。

近年、2人の看護師が良きパートナーとして対等な立場で互いの特性を生かし、相互に補完し合い、日々の看護実践の成果と責任を共有する看護体制である、パートナーシップ・ナーシング・システム（PNS）が盛んに行われている。PNSの効果として、心身が楽になる、コミュニケーションが増す、能力開発につながるなどが示されている<sup>2)</sup>。ペア実習は、1名の患児を中心とした看護実践における成果と責任を学生ペアが共有する点でPNSと共通する。すなわち、学生同士が対等な立場で互いの特性を生かすことで、子どもとのコミュニケーションに困難を感じる学生や緊張の強い学生にとって、学習効果を高めることができるのではないかと考えた。学生がペアで実習を行うことに関して、実習満足度と学生ペアの人間関係は正の相関関係にあるとの報告がある<sup>3)</sup>。しかし、学生自身の視点からペア実習に対する評価を行った研究は少ない。

研究者らは平成28年度に学生がペアで子どもを受け持ち実習することに対して学生がどのように評価しているのかを調査した<sup>4)</sup>。その結果、教員及び実習指導者の配慮により単独での実習に比べて遜色のない実習を保證することができるが、ペアの関係性が強く影響していることが示唆された。しかし、対象となった学生は領域別実習の後半で小児看護実習を受講した学生であったため、グループダイナミクスがある程度形成された状況でペア実習に臨んでいたことが反映したと予測された。

そこで今回、小児看護実習を受講する学生のペア実習に対して感じているメリット・デメリットが、実習実施時期の違いによってどのような差異を生じるのかを明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 対象

小児看護実習において、ペアで患児を受け持ち、実習を行った学生10名

### 2. データ収集方法

データ収集期間は平成28年11月から平成30年4月である。小児看護実習の成績評価が確定した後、研究調査協力に同意が得られた学生に対し、大学内のプライベートが保てる一室で調査を実施した。調査はインタビューガイドを用いた半構成的インタビュー法とし、当該領域以外の研究者が1対1で行った。インタビューの内容は、ペアで実習すると聞いた時の気持ち、ペアで実習することによる実習への影響、実習後の感想等とした。

### 3. 分析方法

本学の臨地実習は、3年生10月から4年生7月にかけて行っている。本研究では、長期休暇を境に3年次の10月から2月を実習前期、4年次の5～7月を実習後期として分析した。

逐語録を精読し、学生の語りからペアで実習することの学生の認識に関連する部分を抜き出し、文脈を損なわないようにコード化し、ペア実習への評価を「ペア実習のメリット」「ペア実習のデメリット」の視点で分類した。その後、コードの類似性、相違性を考慮してカテゴリーを生成した。分析は研究者全体の合意が得られるまで行い、妥当性の確保に努めた。

## III. 倫理的配慮

本研究を遂行するに当たり、以下の倫理的配慮を行った。① 研究の依頼およびインタビューは、当該領域以外の研究者が、強制力が働かないよう細心の配慮をしながら行った。② 研究参加は自由意志であること、本調査は小児看護実習の成績が確定した後にを行うため研究協力の諾否が成績に影響しないこと、分析前までは撤回可能であること、個人情報保護、研究

結果の公表について文書を用いて口頭で説明した後に書面で同意を得た。③ 身体的不利益への配慮として、学校行事などで対象者の疲労が強い時のインタビューは避けた。なお、本学部の研究等倫理委員会の承認(順保倫第 29-10 号)を得てから実施した。

#### IV. 結 果

研究対象となった学生 10 名の内訳は、実習前期での履修者では女子学生のみ 5 名、実習後期での履修者では、男子学生 1 名女子学生 4 名であった。インタビューの所要時間は平均 39 ± 13 分であった。

分析の結果、ペア実習のメリットとして 5 のカテゴリ、14 のサブカテゴリが、ペア実習のデメリットとして 6 のカテゴリ、16 のサブカテゴリが抽出された(表 1)。本研究における文中の表記方法は、カテゴリを【 】, サブカテゴリを〈 〉とした。以下、各カテゴリについて詳細を記す。

##### 1. ペア実習のメリット

カテゴリ【対象理解の深まり】は、〈情報収集の視点の増加〉〈アセスメントの深まり〉〈役割分担による情報量の増加〉〈指導を受ける機会の増加〉の 4 つのサブカテゴリから構成されていた。学生は、ペア同士での異なる視点での観察や情報収集の分担による情報量の増加、ペア同士で相談できることによりアセスメントや学びが深まること、指導を効果的に学習し理解できることにより、対象理解の深まりを感じていた。

カテゴリ【負担の軽減】は、〈作業の分担による負担の軽減〉〈支え合える安心感〉の 2 つのサブカテゴリから構成されていた。学生は、ケアや学習を分担することによる物理的・身体的な負担と、困った時に相談し合えることや教員・指導者への報告時に情報を補い合えることを含めた、同じ状況を体験し苦楽を共にしてきたことでの支え合っている感覚を持つことにより、精神的な負担が軽減されることを感じていた。

カテゴリ【ケアの可能性の拡大】は、〈ケアの質の向上〉〈ケア範囲の拡大〉〈安全かつ効率的なケアの実践〉の 3 つのサブカテゴリから構成されていた。学生は、ペアで相談し合うことによるケアの質の向上や作業分担に伴うケア範囲の拡大や安全性・効率を高めることによる、より患児の個別性に合わせたケアの方法の可能性が広がることを感じていた。実習前期の学生は特にケアの安全性や効率性を重視したメリットを感じ取り、実習後期の学生は特にペアでケアを分担できること、精神的に余裕ができることにより、ケアの幅の拡大を感じていた。

カテゴリ【学習意欲の向上】は、〈学習に対するモチベーションの向上〉〈成果の共有による達成感の増大〉〈他の学生への刺激〉の 3 つのサブカテゴリから構成されていた。学生はペア学生の存在を意識することにより、ペア学生に迷惑をかけてはいけないという責任感や、ペア学生の学習状況を目の当たりにすることによる自分も負けていられないという感情からの学習に対するモチベーションの向上、同じ体験を通しての達成感の共有、ペアを組んだ学生の実習状況に刺激された学生の実習姿勢への影響を含めた、ペアを含めたグループ全体としての学習意欲の向上を感じていた。実習後期の学生は自らの学習が与えるペア学生や患児への責任や影響を認識し、学習へのモチベーションへと変えていた。

カテゴリ【グループの学習機会の拡大】は、〈グループ間での学びの共有〉〈受け持ち児以外への視野の広がり〉の 2 つのサブカテゴリから構成されていた。学生は、カンファレンスで自分たちの受け持ち児がテーマにあがったり看護過程記録を発表する場面で、状況説明を補い合いながら説明することでグループ全体としての理解につながったこと、自分たちの受け持ち児以外にも目を向けることが出来、他学生との学びを共有しやすかったことから、グループ全体での学習機会が拡大したと感じていた。

表1 ペア実習に対するメリットとデメリットの認識

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	時期
メリット	情報収集の視点の増加	ケアの中で患児や家族が表現したことをフォローの学生は気がつきやすい *	前期(2)
		同じ場面を見ていても、異なる気づきがあり勉強になった **	後期(3)
	アセスメントの深まり	ペア学生とは異なる視点で情報を集めることができた *	
		互いの意見を共有することで視野が広がる **	前期(3)
	役割分担による情報量の増加	ペアで相談しながらアセスメントしたため、情報の統合が深まった **	後期(4)
		指導内容をペアで確認しあい、分析を掘り下げることができた *	
	指導を受ける機会の増加	必要な情報を二人で分担して集めることができる **	前期(3)
		自分が不在にしている間(外来実習)の出来事を共有した *	後期(2)
	支え合える安心感	役割分担することで落ち着いて情報を得ることができた *	
		教員や指導者がカバーしなければならぬ患者数が減り、結果的に指導を得る機会が増えた *	前期(1)
作業の分担による負担の軽減	同じ状況を体験し、支え合っている感覚がある **	前期(4)	
	指導者もしくは教員による指導場面で2人だと緊張感が和らぐ *	後期(3)	
ケアの質の向上	迷っている時にペア学生と相談できるため、1人で抱え込まないで済む *		
	ケアにかかる時間の短縮や負担の軽減でき、必要なことに時間が取れる **	前期(2)	
ケアの可能性の拡大	状況に合わせて役割分担し互いのできないことを補うことができる **	後期(4)	
	2人で作業を分担し効率的に作業できる *		
学習意欲の向上	ペア学生の介入を見ることで自らの介入を見直すきっかけとなった **	前期(3)	
	異なる視点からお互いに気付いたことを共有してケアに反映させることができた *	後期(3)	
グループの学習機会の拡大	お互いの意見の良いところを採用し行動計画を立案することができた *		
	作業を分担できるためケアに広がりが出る **	後期(3)	
受け持ち児以外への視野の広がり	他の方向性を2人で模索しケアの幅が広がった **		
	同じ場面で患児と母親それぞれを分担して関わることができた **	前期(4)	
方針のすり合わせに伴う困難	バイタルサインの測定の場面でディストラクションと測定を分担することでうまく実施できた		
	動きが激しく制動がききにくい患児のケア時の安全を確保しやすい *	前期(4)	
学習意欲の向上	1人でやるよりも協力してやったほうがスムーズに行動計画が進んだ *		
	相手の良いところを参考にしてモチベーションをあげる **	後期(3)	
グループの学習機会の拡大	相手に迷惑をかけないようにという意識が生まれ予習する **		
	子どもの反応をペア同士で共有できることは楽しい *	前期(2)	
受け持ち児以外への視野の広がり	2人分の実習目標を持ちながら行動しているため、達成できた時の達成感は大い *	後期(1)	
	ペアの学生が協力している姿を見て、他の学生も協力する姿が増えた **	後期(1)	
受け持ち児以外への視野の広がり	患児紹介をする時に情報量が多いため、他の学生も患児をイメージしやすい	前期(2)	
	共通する疑問をカンファレンス等にあげやすい **	後期(2)	
受け持ち児以外への視野の広がり	他の学生にカンファレンス等を通じて情報や学びを共有しやすい *		
	余裕ができるため他の学生の受け持ち患児とも関わることができる *	前期(1)	
受け持ち児以外への視野の広がり	協働している分、自分のこだわりを發揮しにくい **	前期(3)	
	お互いのこだわりが合わない負担になる **	後期(3)	
受け持ち児以外への視野の広がり	ペア学生が意思表示が難しい学生だとペアとしての意思決定に困難が伴う *		
	一方の学生への負担の増加	ペア学生が自分の意見を持たない場合、相談がしにくい *	前期(3)
受け持ち児以外への視野の広がり	記録の面を相手に任せてしまい、負担をかけたのではないかと感じる *		
	共有すべき情報の判断への困難	2人いるから分かち合えると思っていた分、そうでなかった場合負担が増す *	後期(3)
受け持ち児以外への視野の広がり	1人の時に得た情報をペアで共有した場合に患児や家族に対してどのように対応したら良いか迷う **		
	情報共有に向けた時間確保の困難	ペア間で気になる部分が異なると共有が難しい **	後期(3)
受け持ち児以外への視野の広がり	ライフスタイルが異なるため、実習時間外での情報共有が難しかった **		
	実習に対する主体性の低下	朝の行動計画発表でずれが生じる **	前期(3)
受け持ち児以外への視野の広がり	相手の勢いに押され補助的に回ってしまったことがある *		
	自己の思考の停滞	指導や報告時に指導者もしくは教員とのやりとりはペアに任せる *	前期(3)
受け持ち児以外への視野の広がり	ペア学生の意見に引っぱられてしまう *		
	ペア学生との関係性への不安	相手の記録を見ることで考え方が引っぱられる *	前期(3)
受け持ち児以外への視野の広がり	ペア学生との関係性ができていなかったため、相手とどう接したら良いかわからなかった *	前期(1)	
	他学生と異なる行動への戸惑い	相手の性格もわからずどう関わっていくかわからない中での実習は精神的負担は大い *	後期(1)
受け持ち児以外への視野の広がり	1日の行動目標を一緒にしたほうがよいのか、それとも個々に立てたほうが良いのか迷う *	前期(1)	
	小児というこれまで経験したことのない状況でのペア実習は動揺が大い *	後期(1)	
受け持ち児以外への視野の広がり	他者からのペア学生との比較に対するプレッシャー	同じ患児について記録をまとめるため、差がはつきりしてしまう **	前期(1)
	楽をしていると思われる嫌悪	ペアの学習状況が見えることで自分の劣っている部分が見えてしまう **	後期(3)
ケアの質の低下	ケア中の意思決定の困難	周りの学生から楽そうに見られたりアセスメントができていないかと思われるのは嫌だった *	前期(1)
	病室内でのスペース確保の困難	突発的なことに対して臨機応変に決定することが難しい **	後期(3)
ケアの質の低下	ケアの際に学生2人と指導者・教員が並ぶにはスペースが足りない *		
	2人での訪室は患児に圧迫感を与えるという懸念のため控えた **	前期(1)	
ケアの質の低下	スペースが限られているため、2人で病室に入るのはためらった **	後期(2)	
	家族の気遣いへの懸念	学生2人が病室に入ることによる家族への負担を気にする *	前期(2)
ケアの質の低下	家族にとって2人の学生を相手にするのは負担が大いのではないかと懸念する *		
	患児とのコミュニケーション機会の減少	患児と個人で関わる時間が減るため患者とうまく関われるか不安があった *	後期(1)
学習機会の減少	指導を受ける機会の減少	教員からの指導時間が短くなる感覚がある **	後期(1)
	ケア実施の機会の減少	一人で受け持った時よりは自分が援助できる機会は限られる *	前期(1)
学習機会の減少	中心となる看護計画が同じになってしまった場合の実施の機会が減ることが心配だった *	後期(1)	
	中心となる看護計画が同じになってしまった場合の実施の機会が減ることが心配だった *		

\*1 実習初期の学生から抽出されたコードは\*、実習後期から抽出されたコードは\*\*で示した。

\*2 「時期」の欄には各実習時期におけるコードが抽出された人数を( )に示した。

## 2. ペア実習のデメリット

カテゴリー【方針のすり合わせに伴う困難】は、〈方針のすり合わせに伴う疲弊〉〈一方の学生への負担の増加〉〈共有すべき情報の判断への困難〉〈情報共有に向けた時間確保の困難〉の4つのサブカテゴリーから構成されていた。学生は、ペア同士のこだわりが合わないことや関係性が構築されていないことによる方針のすり合わせにおいて疲弊し、限られた時間の中で共有すべき情報の選択や時間の確保に困難感を感じていた。実習前期の学生は特に関係性の構築がままならないことによる負担、すなわち、役割分担がうまくできず一方の学生への負担の集中や、互いに意見を言いにくいことによる方針決定への疲弊を感じていた。実習後期の学生は特に自分自身の考え方やこだわりが確立したことによる方針のすり合わせの困難や共有すべき情報の判断への困難を感じていた。また、ライフスタイルの違いから情報共有のための時間確保に困難を感じていた。

カテゴリー【主体性発揮の阻害】は、〈実習に対する主体性の低下〉〈自己の思考の停滞〉の2つのサブカテゴリー構成されていた。特に実習前期の学生は、アセスメント能力が未熟なことやペアの関係性の構築が不十分であることから、自分自身の考えがまとめきれずにペア学生の考えに引っ張られてしまったり、自分の考えを表現しきなかつたりすること、ペア学生からフォローを受けられることによる依存により学習への主体性の発揮しにくい状況にあった。このカテゴリーは主に実習前期の学生から抽出された。

カテゴリー【実習の進め方への戸惑い】は、〈ペア学生との関係性への不安〉〈他学生と異なる行動への戸惑い〉の2つのサブカテゴリー構成されていた。学生は、子どもとの関わりに慣れていない状況で他の学生と異なる実習方法をとることに対し、実習の進め方やペア学生との関係性の取り方に対して不安を感じていた。また、特に実習前期の学生は実習自体に不慣

れである状況の中で、他の学生とは異なるペアで実習を行うことに対し、実習方法やペア学生との関係性の面で戸惑いを感じていた。

カテゴリー【周囲からの評価に対する不安】は、〈他者からのペア学生との比較に対するプレッシャー〉〈楽をしていると思われる嫌悪〉の2つのサブカテゴリーから構成されていた。学生は、同じ患児を受け持つ中でケアの技術や実習記録など評価される場面において、ペア学生と比較されることにより、自分の劣っている部分が浮き彫りになってしまうのではないかとプレッシャーを感じていた。また、ペアでの実習を行う際は比較的ケア度の高い患児を受け持つため実際はやらなければならないことが多いにも関わらず、他学生からペアで協力しあえることに対して負担が少ないと評価をされることに不満を感じる者もいた。

カテゴリー【ケアの質の低下】は、〈ケア中の意思決定の困難〉〈病室内でのスペース確保の困難〉〈保護者の気疲れへの懸念〉の3つのサブカテゴリーにより構成されていた。学生は、ケア中に予想外の状況が生じた際に、互いの意見がうまくまとめられず、臨機応変な行動への困難を感じていた。また、限られたスペースに学生2名、教員・指導者、場合によっては家族が在室することにより、患児や家族に対して圧迫感を与えるのではないかと懸念していた。特に実習前期の学生は、学生2名が訪室することに対して保護者に気疲れさせてしまうのではないかと懸念していた。

カテゴリー【学習機会の減少】は、〈患児とのコミュニケーション機会の減少〉〈指導を受ける機会の減少〉〈ケア実施の機会の減少〉の3つのサブカテゴリーから構成されていた。学生は、実習期間の中で限られたケアを2人で分け合うことに対して、患児とのコミュニケーションをとる機会や、ケアを実践する機会が減少することを懸念していた。また、教員や指導者から受ける実習指導も2人一緒にまとめて行われてしまい、個々で受けられる指導の機会が減るのではないかと

と懸念していた。

## V. 考 察

### 1. ケアへの視点について

実習前期の学生は〈ケアの質の向上〉も感じてはいるものの、その中心は〈安全かつ効率的なケアの実践〉であったのに対し、実習後期の学生はメリットとして〈ケア範囲の拡大〉や〈ケアの質の向上〉が中心的に挙げられた。これらのメリットの中核であるケアの質の向上は、先行研究<sup>5)6)</sup>でも報告されており、妥当であると考えられる。小代らは小児看護実習に臨む学生のネガティブな特徴として、子どもとの少ない接触体験での自信のなさから子どもの言動の意味が理解できないこと、子どもに対する看護技術力の弱さを挙げた<sup>7)</sup>。実習前期では実習や子どもとの関わり、ペア学生との協働に不慣れであること、看護技術が未熟であることから、ケアの基本である安全性や効率性の確保に意識が向きがちである。しかし、実習経験を積む中で、看護実習という学習方法への慣れや看護の注意点や配慮、教員や指導者への報告から実施までの効率化ができるようになり、1つの視点に捕らわれず、患児の全体を見据えた計画を立てて実施する看護過程学習の充実を学生自身が求めるように変化することを示しているものと捉えられる。特に実習前期においては、学生が実習場面に落ち着いては入れるよう技術面、知識面でのサポートを意識的に増やし、徐々に視野の拡大を促す段階に移行することが示唆された。

### 2. 協働学習について

〈実習に対する主体性の低下〉は、自分自身で解決しなくともペア学生にフォローしてもらえらるであろうという安易な依存心や、ペア学生に自分の意見をうまく伝えられないことから生じていた。〈自己の思考の停滞〉は、一つの考え方に触れるとそれ以外の視点を持つことができないアセスメント能力の未熟さから自分自身の考えを持つことが出来ないことに起因してい

た。これらの状況が行き過ぎた場合には、〈一方の学生への負担の増加〉につながっていた。これらに示される実習前期の学生の特徴として、アセスメントを自分なりに考え表現する力や対人関係の未熟さ、実習への責任の希薄さが読み取れる。森岡らは、PNSのデメリットの一部として「熟考することが少ない」「責任が曖昧になる」「主張できない」を抽出した<sup>8)</sup>。PNSの持つ、ペアを組んでケアに当たるという点において本研究の結果と共通するものと捉えることができ、ペアを組むことによって自分自身の考えを持つこと、責任感を持つことは通常よりも困難となる可能性が示唆された。

その一方で、実習後期の学生では、〈学習に対するモチベーションの向上〉に示されたように、実習経験を積む中で、学生は各々の看護ケアに対する責任を自覚するようになったことが伺えた。また、実習のどの段階においても、〈方針のすり合わせに伴う疲弊〉は抽出されたものの、その内容に違いがあった。実習前期では、自分のアセスメントに対する自信の無さから意見自体が出てこないこと、自分の考えが否定されることに対する不安による疲弊であったのに対し、実習後期では、それぞれの考え方やこだわりが出てきたことによる意見のすり合わせに疲弊を感じていた。この結果から、学生は実習経験を積む中でアセスメント能力や責任感が着実に身につけていることが伺えたが、コミュニケーション能力が伴っていない場合、ペア実習の効果が半減する可能性が示唆された。

以上から、学生のコミュニケーション能力やアセスメント能力、責任感における特性を踏まえ、ペア学生それぞれの考えを引き出し、実習に対する姿勢を学ばせること、学生間のコミュニケーションの状況を捉えつつ適切なファシリテートすることで着実に成長を促していくことが求められる。

### 3. 保護者との関係

実習前期では、学生は保護者との距離感について、

自分たちが同じ空間にいることにより、保護者が気疲れしてしまうのではないかと感じ、〈保護者の気疲れへの懸念〉として抽出された。その一方で、実習後期になると、学生は保護者をケアの対象として捉え、それは〈ケア範囲の拡大〉という形で抽出された。先行研究では、子どもに不慣れなことから、学生は母親とのコミュニケーションに対して不安を感じていること<sup>8)</sup>や、学生は母親の前で患児に援助するプレッシャーを感じたり、自分の中で考え過ぎて母親に遠慮しすぎたりするといった傾向を持ちつつも、母親や患児に配慮したケアを積み重ねることで関係性を深めていたこと<sup>10)</sup>が報告されている。実習前期の学生はベッドサイドにいるということで精一杯で、自分のできるケアや関わり方を考える以前に患児とその保護者が自分たちと関わることで疲弊するのではないかという思いにとらわれている状況が伺える。一方で実習経験を積み、自律して行動を選択しそれを適切に評価できるようになる中で、保護者に対しても自分たちができることを見出すことができるようになっていく状況も伺えた。実習前期においては保護者に対して学生ができること、できたことの認識を積み重ねていけるよう留意することが望まれる。

## VI. 結 論

学生が捉えたペア実習のメリットとして、【対象理解の深まり】【負担の軽減】【ケアの可能性の拡大】【学習意欲の向上】【グループの学習機会の拡大】の5のカテゴリーが、デメリットとして、【方針のすり合わせに伴う困難】【主体性発揮の阻害】【実習の進め方への戸惑い】【周囲からの評価に対する不安】【ケアの質の低下】【学習機会の減少】の6のカテゴリーが抽出された。学生は実習経験を積む中で、ペア学生との協働を進める上で自らに課せられた責任を自覚し、看護過程学習の充実を学生自身が求めるようになることで、個人ではなくペアとして実践をより良いものにした

という意識の変革が伺えた。教員・指導者は学生の変化の過程を捉えた指導により、ペア実習の学習効果を高めることができることが示唆された。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省, 平成 27 年度 (2015) 医療施設 (動態) 調査・病院報告の概況, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/15/dl/gaikyo.pdf>, 2016.
- 2) 三輪峰子, 川尻麻佑子, 安井裕美子, 野中真由美, 河村仁美: パートナーシップ・ナーシング・システム導入による成果と成果に影響する要因分析, 第 45 回日本看護学会論文集 看護管理, 19-22, 2015.
- 3) 平山綾蘭, 市川英加, 長田貴子, 押領司民: ペア実習の人間関係と実習満足度のとの関係, 第 42 回日本看護学会論文集 看護教育, 46-48, 2012.
- 4) 林亮, 齊藤麻子, 石井くみ子, 川口千鶴, 西田みゆき: 小児看護実習におけるペア実習に対する学生の評価. 順天堂保健看護研究, 6, 34-41, 2018.
- 5) 佐藤朝美, 小村三千代, 堀田昇吾: ピア・ラーニングを活用した“ペア受持ち制”小児看護学実習における学生の体験. 日本看護学会誌, 27, 73-82, 2018.
- 6) 二宮恵美: 小児看護学実習においてペア実習を行った学生の思いプラスの思いとマイナスの思いについて. 日本看護学会論文集, 44, 174-177, 2014.
- 7) 小代仁美, 榎木野裕美: 小児看護学実習初期における看護学生と子どもとの関係に影響する要因—小児看護学実習指導教員の視点—. 日本小児看護学会誌, 21(3), 14-21, 2012.
- 8) 森岡広美, 中本明世: 若手看護師が捉えたパートナーシップ・ナーシング・システム (PNS) のメリットとデメリットから離職率低下に向けたサポート方法の検討. 梅花女子大学看護保健学部紀要, 7,

16-26, 2017.

- 9) 荒木真壽美, 吉田美幸: 小児看護学実習における学生の不安と学びの特徴. 第43回日本看護学会論文集 小児看護, 157-160, 2013.
- 10) 菅原美保: 小児看護実習において学生が患児とその母親の3人で過ごす体験. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 13(1), 21-26, 2017.